

# 富士山が見たい

## 日本をこよなく愛した宰相・吉田茂②

### ワンマン宰相の真実

本誌主幹 大中吉一

#### GHQと渡り合った7年間

昭和20年（1945年）東京大空襲、そして広島・長崎への原爆投下と、大量の日本の一般市民が犠牲となる惨劇を経て、よもや本土決戦止む無しという空気が漂う中、昭和天皇の英断による玉音放送によって日本は更なる惨劇を回避し、敗戦を決意しました。

当時を振り返っての吉田茂氏の言葉に「日本は敗戦によって国力が消耗し、瘦せ馬のようになっていて、



吉田茂氏

このひよろひよろの瘦せ馬に過度の重荷を負わせると馬自体が参ってしまふ」があります。つまり、再軍備など国力を云々する以前に経済復興を優先したのです。安全保障条約を結ぶことによって米国の協力を得たとしても、それは国辱ではないどころか、悲惨な状況下における日本にとっては名誉にはなるうとも恥辱にはならないと、吉田氏自身も断言しています。

多くの人たちが、吉田氏による戦後処理のせいで日本人の独立心が弱められたり、アメリカに従属する傾向が生まれたりしたという説は多いですが、平和な現代からは想像もつかないような戦後の惨状を考えれば、大きな時代の流れを客観的に見つめて日米講和条約に与した吉田氏の深い「読み」はとても大きな功績

だったと思います。戦後80年を過ぎ、それこそ平和ボケをした学者や政治家が勝手なことを言っているようにしか思えないのです。

よく吉田茂氏を「ワンマン宰相」と例えますが、それは浅はかな周囲の人々が吉田氏の深い考察についていけず、それでも国を想う姿勢から首相として独断を下すことが多かったからではないでしょうか。吉田氏の心中にはそうした苛立ちが常に燻っていたのだと私は想像します。

日米の開戦当初から日本の敗戦を予告する冷徹ともいえる判断力をもっていた一方で、日本の戦時体制が共産主義体制への接近をもたらすと天皇陛下に進言する視点も持っていたと聞きます。そうした凡人には及びもつかない考察のせいで、第2次大戦中は親英米派として睨まれて

憲兵隊に逮捕されたこともあったそうです。

結果的に7年も続いたGHQによる占領期、マッカーサー元帥は「日本を太平洋のスイスにする」と称して日本の武装解除、弱体化政策を推進しました。その米国による対日政策を変更させたのは吉田氏の深い読みと状況判断そして智慧だったと思います。

世界を見渡せば、ソビエト連邦による共産主義が世界各国に拡がり、中国では共産党の支配が進み、朝鮮では内乱が起り、ドイツは東西に分断され、いわゆる冷戦が始まったのです。そうした状況下で、日本という国を共産主義に対するアジアの防波堤とするために、米政府の目を自衛権の保持に向けさせたのだと思います。

吉田氏は、戦争直後の昭和20年（1945年）9月に東久邇宮稔彦（なるひこ）内閣の外相となり、それに次ぐ幣原喜重郎内閣でも外相として留任しました。さらに公職追放となった鳩山一郎氏の後任として日本自由党総裁となり、翌昭和21年（1946年）8月から吉田内閣が誕生します。

第1次吉田内閣においては、経済安定本部の発足や傾斜生産方式の検討などに取組みましたが、まだまだ日本独立への道は険しく、昭和24年（1949年）に設定された自由主義的均衡策としての「ドッジ・ライン」への対応を余儀なくされました。それでもこれをきっかけに経済復興から経済成長へ転化していく戦後日本の経済政策の基本路線を描くことができ、そして第3次吉田内閣

中で米国、英国などを主要対象国とする講和条約を成立させ、昭和26年（1951年）首席全権委員としてサンフランシスコ講和会議に出席しました。

### 日本復興の大恩人

まず9月8日、サンフランシスコ講和会議において、サンフランシスコ平和条約に署名すると、そのまま同日に日本国と米国における安全保障条約（日米安保）も締結します。当時、日本国内では全面講和論の支持者もおり、諸説入り乱れる中で決断だったといえます。政治生命を賭けての吉田氏の平和条約の調印でしたが、帰国後の内閣支持率は戦後

最高の58%（朝日新聞）となり、吉田氏の決断は多くの賛同を得られたことが証明されました。

じつは、吉田氏はサンフランシスコから日本に戻る際に、多くの国民から批判を浴びることを覚悟していたそうです。後日、吉田氏は「国のために正しいことをすれば、そのときには理解をされなくとも後世にはその意味が理解される」と思っていたが、実際には多くの万歳と日の丸に迎えられ、自分は運が良かったと述べたそうです。

ところが昭和28年（1953年）3月14日には、あの「バカヤロウ解散」が起こります。吉田氏はあくまでも不規則発言として「バカヤロウ」と呟いたにすぎず、質問者である西村榮一氏とは戦中からさまざまな因縁もあって、そのような発言となつたと聞いています。基本的に相手が礼儀の正しい人なら、その身分がどうであろうと丁寧に振舞ったとも言われる吉田氏です。よほど腹に据えかねる事態だったのだろうと想像します。

吉田氏は日本の首相で唯一、5回に渡り内閣総理大臣に任命されまし

たが、翌昭和29年（1954年）12月7日、野党による内閣不信任案の可決が確実視される中、吉田内閣は総辞職し、その2616日にも及ぶ在任期間は終焉を迎えました。

吉田氏が創立にも大きく関与した『防衛大学校』の第1期生の卒業にあたり、卒業アルバム制作費の肩代わりを申し出た吉田茂氏は、大磯の吉田邸に数人の第1期卒業生を呼び寄せました。彼らが帰らんとする際に、

「君たちは自衛官在職中、決して国民から感謝されたり、歓迎されることもなく自衛隊を終えるかもしれない。ご苦労なことだと思う。しかし、自衛隊が国民から歓迎され、ちやほやされる事態とは、外国から攻撃されて国家存亡の危機の時か、災害派遣の時とか、国民が困窮している時だけなのだ。言葉を変えれば、君たちが日蔭者である時の方が、国民や日本は幸せなのだ。一生御苦労なことだと思うが、国家のために忍び耐えてもらいたい。頑張ってくれ。君たちの双肩にかかっているんだ。しっかりと頼むよ」と吉田氏は語ったそうです。



旧吉田邸より

昭和42年（1967年）10月19日、病の床にあつた90歳（満89歳）の吉田翁は「富士山が見たい」と病床で呟き、飽かず快晴の富士山を眺めていたそうです。翌日、吉田氏は穏やかに逝かれました。その日も大磯からは美しい富士山が見えていたそうです。

常に国民に目を向け、世界を俯瞰し、その未来に向けての日本の探るべき道を考察し続けた吉田茂氏は、日本復興の大恩人であり、戦後の日本をタガが緩むほど安泰な国にしてくれたひとりだと思います。だからこそ、吉田氏は今の日本の状況をどんな思いで見ているのか、今こそ考えたいと思います。